

# 千日尼御前御返事

弘安元年七月二八日 五七歳

弘安元年<sup>太歳</sup>七月六日、<sup>さ</sup>佐渡国より<sup>千日尼</sup>と申す人、同じく日本国甲州波木井の郷身延山と申す<sup>み</sup>深山へ、同じく夫の阿仏房を使ひとして送り給ふ御文に云はく、女人の罪障はいかゞと存じ候へども、御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候ひしを、万事はたのみまいらせ候ひて等云云。

夫、<sup>それ</sup>法華経と申し候御経は誰れの仏の説かせ給ひて候ぞとをもひ候へば、此の日本国より西、漢土より又西、<sup>りゅう</sup>流沙・<sup>そう</sup>葱嶺と申すよりは又はるか西、月氏と申す国に<sup>じょう</sup>浄飯王と申しける大王の太子、十九の年、位をすべらせ給ひて<sup>特</sup>檀とく山と申す山に入り御出家、三十にして仏とならせ給ふ。身は金色と変じ、<sup>たましい</sup>神は三世をかゞみさせ給ひ、すぎにし事、来たるべき事、<sup>鏡</sup>かゞみ<sup>鏡</sup>にかけさせ給ひてをはせし仏の、五十余年が間一代一切の経々を説きをかせ給ふ。

此の一切の経々、仏の滅後一千年が間、月氏国にやうやくひろまり候ひしかども、いまだ漢土日本国等へは来たり候はず。仏滅度後一千十五年と申せしに漢土へ仏法渡りはじめて候ひしかども、又いまだ法華経はわたり給はず。仏法漢土にわたりて二百余年に及んで、月氏と漢土との中間に<sup>き</sup>亀茲国と申す国あり。彼の国の内に<sup>く</sup>鳩摩羅<sup>えん</sup>三蔵と申せし人の御子<sup>く</sup>鳩摩羅<sup>じゅう</sup>什と申せし人、彼の国より月氏に入り、<sup>し</sup>須利耶<sup>そ</sup>蘇摩<sup>三</sup>蔵と申せし人に此の法華経をさづかり給ひき。其の授け給ひし時の御<sup>ことば</sup>語に云はく「此の法華経は東北の国に縁ふかしと」云云。此の御語を持ちて、月氏より東方の漢土へはわたし給ひ候なり。漢土には仏法わたりて二百余年、<sup>こう</sup>後秦王<sup>のう</sup>の御宇に渡りて候ひき。

日本国には人王第卅代欽明天皇の御宇、<sup>みよ</sup>治十三年<sup>みよ</sup>十月十三日<sup>き</sup>辛酉日、此より西、百済国と申す国より<sup>王</sup>聖明皇、日本国に仏法をわたす。此は漢土に仏法わたて四百年、仏滅後一千四百余年なり。其の中にも法華経はましまししかども、人王第卅二代用明天皇の太子<sup>にん</sup>聖徳太子と申せし人、漢土へ使ひをつかわして法華経を<sup>取</sup>とり<sup>寄</sup>よせまいらせて日本国に弘通し給ひき。其より<sup>この</sup>来<sup>かた</sup>七百余年なり。仏滅度後はすでに二千二百三十余年になり候上、月氏・漢土・日本、山々・河々・海々、遠くへだたり、人々・心々・国々、各々<sup>わか</sup>別たりて、語かわり、<sup>品</sup>しな<sup>品</sup>ことなれば、いかでか仏法の御心をば我等凡夫は<sup>わ</sup>弁<sup>きま</sup>へ候べき。たゞ経々の文字を引き合はせてこそ知るべきに、一切経はやうやうに候へども、法華経と申す御経は八巻まします。流通に<sup>ふ</sup>普賢<sup>げん</sup>経、序文の無量義経、各一卷已上。此の御経を開

き見まいらせ候へば、明らかなる鏡をもって我が面を見るがごとし。日出でて草木の色を弁ふるににたり。序分の無量義經を見まいらせ候へば「四十余年未顕眞実」と申す經文あり。法華經の第一の卷方便品の始めに「世尊の法は久くして後、<sup>かなら</sup>要<sup>かなら</sup>ず当に眞実を説きたまふべし」と申す經文あり。第四の卷の宝塔品には「妙法華經皆是眞実」と申す明文あり。第七の卷には「舌相梵天に至る」と申す經文赫々たり。其の外は此の經より外の<sup>前</sup>さきの<sup>後</sup>ちならべる經々をば星に譬へ、江河に譬へ、小王に譬へ、小山に譬へたり。法華經をば月に譬へ、日に譬へ、大海・大山・大王等に譬へ給へり。此の語、私の言には有らず。皆如来の金言なり。十方の諸仏の<sup>ごひょうじょう</sup>御評定の御言なり。一切の菩薩・二乗・梵天・帝釈、今の天に懸かりて明鏡のごとくまします日月も、見給ひき聞き給ひき。其の日月の御語も此の經にのせられて候。月氏・漢土・日本国のふるき神たちも、皆其の座につらなりし神々なり。天照太神・八幡大菩薩・熊野・すゞか等の日本国の神々も、あらそい給ふべからず。此の經文は一切經に勝れたり。地走る者の王たり、師子王のごとし。空飛ぶ者の王たり、<sup>わし</sup>鷲のごとし。南無阿弥陀仏經等は<sup>む</sup>きじのごとし、<sup>うさぎ</sup>兎のごとし。鷲につかまれては涙をながし、師子にせめられては腹わたをたつ。念仏者・律僧・禪僧・眞言師等又かくのごとし。法華經の行者に<sup>あ</sup>値ひぬれば、いろを失ひ魂をけすなり。かゝるいみじき法華經と申す御經は、いかなる法門ぞと申せば、一の卷方便品よりうちはじめて、菩薩・二乗・凡夫皆仏になり給ふやうをとかれて候へども、いまだ其のしるしなし。<sup>たと</sup>設へば<sup>まろうど</sup>始めた<sup>すがた</sup>る客人が、<sup>わし</sup>相貌うるわしくして心もいさぎよく、口もきいて候へば、いう事疑ひなけれども、さきも見ぬ人なれば、いまだあらわれたる事なければ、語のみにては信じがたきぞかし。其の時語にまかせて大なる事度々あひ候へば、さては後の事もたのもしななど申すぞかし。一切信じて信ぜられざりしを、第五の卷に即身成仏と申す一經第一の肝心あり。譬へば<sup>黒</sup>くろき物を白くす事、漆を雪となし、不浄を清浄になす事、<sup>によいじゆ</sup>濁水に如意珠を入れたるがごとし。<sup>りゆうによ</sup>竜女と申せし<sup>くちなわ</sup>小蛇を現身に仏になしてましましき。此の時こそ一切の男子の仏になる事をば疑ふ者は候はざりしか。されば此の經は、女人成仏を手本としてとかれたりと申す。

されば日本国に法華經の正義を弘通し始めまませし、叡山の根本伝教大師の此の事を<sup>のうけしよけとも</sup>積し給ふには「<sup>りやっこう</sup>能化所化俱に歴劫無し。妙法經力即身成仏す」等。漢土の天台智者大師、法華經の正義をよみはじめ給ひしには「他經は但、男に記して女に記せず乃至今經は皆記す」等云々。此は一代聖教の中には法華經第一、法華經の中には女人成仏第一なりとことわらせ給ふにや。されば日本一切の女人は法華經より外の一切經には女人成

仏せずと嫌きらふとも、法華經にだにも女人成仏ゆるされなば、なにかくるしかるべき。

しかるに日蓮はうけがたくして人身をうけ、値あひがたくして仏法に値ひ奉る。一切の仏法の中に法華經に値ひまいらせて候。其の恩徳ををもへば父母の恩・国主の恩・一切衆生の恩なり。父母の恩の中に慈父をば天に譬へ、悲母をば大地に譬へたり。いづれもわけがたし。其の中に悲母の大恩ことにほうじがたし。此れを報報ぜんとをもうに外典の三墳ぶん・五典・孝經等によて報ぜんとをもへば、現在をやしないで後生をたすけがたし。身をやしない魂をたすけず。内典の仏法に入りて五千七千余巻の小乗・大乘は、女人成仏難かたければ悲母の恩報じがたし。小乗は女人成仏一向に許されず。大乘經は或は成仏、或は往生を許したるやうなれども仏の仮言かりごとにて実事なし。但法華經計りこそ女人成仏、悲母の恩を報ずる実の報恩經にては候へと見候ひしかば、悲母の恩を報ぜんために、此の經の題目を一切の女人に唱へさせんと願す。其れに日本国の一切の女人は漢土の善導、日本の恵心えしん・永觀ようかん・法然等にすかされて、詮とすべきに南無妙法蓮華經をば一国の一切の女人一人も唱ふることなし。但南無阿弥陀仏と一日に一返十返百千万億反乃至三万十万反、一生が間昼夜十二時に又他事なし。道心堅固なる女人も又悪人なる女人も弥陀念仏を本とせり。わづかに法華經をことゝするやうなる女人も月まつまでのてすさび、をもわしき男のひまに心ならず心ざしなき男にあうがごとし。

されば日本国の一切の女人、法華經の御心に叶ふは一人もなし。我が悲母に詮とすべき法華經をば唱へずして弥陀に心をかけば、法華經は本ならねばたすけ給ふべからず。弥陀念仏は女人をたすくる法にあらず。必ず地獄に墮ち給ふべし。いかんがせんとなげきし程に我が悲母をたすけんために、弥陀念仏は無間地獄の業なり。五逆にはあらざれども五逆過にすぎたり。父母を殺す人は其の肉身をばやぶれども、父母を後生に無間地獄には入れず。今日本国の女人は必ず法華經にて仏になるべきを、たぼらかして一向に南無阿弥陀仏になしぬ。悪ならざればすかされぬ。仏になる種ならざれば仏にはならず。弥陀念仏の小善をもって法華經の大善を失ふ。小善の念仏は大悪の五逆罪にすぎたり。譬へば承平しょうへいの将門まさかどは關東八箇国をうたへ、天喜てんきの貞任さだとうは奥州をうちとゞめし。民を王へ通ぜざりしかば朝敵となりてついにほろぼされぬ。此等は五逆にすぎたる謀反むほんなり。今、日本国の仏法も又かくのごとし。色かわれる謀反なり。法華經は大王なり、大日經・觀無量壽經・真言宗・浄土宗・禪宗・律僧等は彼々の小經によて法華經の大怨敵おんてきとなりぬ。而るを日本の一切の女人等我が心のをろかなるをば知らずして、我をたすくる日蓮をかたきとをもひ、大怨敵たる念仏者・禪・律・真言師等を善知識とあやまてり。た

すけんとする日蓮かへりて大怨敵とをもわるゝゆえに、女人こそりて国主に讒言ざんげんして伊豆国へながせし上、又佐渡国へながされぬ。

ここに日蓮願して云はく、日蓮は全く誤りなし。設ひがごとひ僻事なりとも日本国の一切の女人たすを扶けんと願せる志はすてがたかるべし。何かたすに況んや法華經のまゝに申す。而るを一切の女人等信ぜずばさてこそ有るべきに、かへりて日蓮打をうたする。日蓮が僻事か、釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・二乗・梵・釈・四天等いかに計らひ給ふぞ。日蓮が僻事ならば其の義を示し給へ。ことには日月天は眼前の境界なり。又仏前にしてきかせ給へる上、法華經の行者をあだまんものをば頭破ずは七分等と誓はせ給ひて候へばいかんが候べきと、日蓮強盛にせめまいらせ候ゆへに天此の国を罰する。ゆへに此の疫やくびょう病出現せり。他国より此の国を天仰をほせつけて責めらるべきに、両方の人あまた死すべきに、天の御計ひとしてまづ民を滅して人の手足を切るがごとくして、大事の合戦なくして、此の国の王臣等をせめかたぶけて、法華經の御敵を滅して正法を弘通せんとなり。

而るに日蓮佐渡国へながされたりしかば、彼の国の守護等は国主の御計ひに随つて日蓮をあだむ。万民は其の命に随う。念仏者・禅・律・真言師等は鎌倉よりもいかにもして此へわたらぬやう計れと申しつかわし、極楽寺の良觀等は武蔵むさしの前司ぜんじ殿の私みぎょうしよの御教書を申して、弟子に持たせて日蓮をあだみなんとせしかば、いかにも命たすかるべきやうはなかりしに、天の御計らひはさておきぬ。地頭・地頭等、念仏者・念仏者等、日蓮が菴室あむろに昼夜に立ちそいて、かよう人通をあるをまどわさんとせめしに、阿仏房あぶらふに櫃ををしをわせ、夜中に度々御わたりありし事、いつの世にかわすらむ。只悲母ははの佐渡国に生まれかわりて有るか。

漢土はいこうに沛公と申せし人、王の相ありとて秦の始皇しん しこう ちよくせんの勅宣を下して云はく、沛公打ちてまいらせん者には不次の賞を行なふべし。沛公は里の中には隠れがたくして山に入りて七日・二七日など有りしなり。其の時命終すでにをわりぬべかりしに、沛公の妻女つ まりょうこう呂公と申せし人こそ山中よりよりを尋ねて時々命をたすけしか。彼は妻なれば情なさけすてがたし。此は後世ををぼせずば、なにしにかかくはをはずべき。又其の故に或は所ををい、或は科 科くわれうをひき、或は宅をとられなんどせしに、ついにとをらせ給ひぬ。法華經には過去に十万億の仏を供養せる人こそ今生には退せぬとわみへて候へ。されば十万億供養の女人なり。其の上、人は見る眼の前には心ざし有れども、さしはなれぬれば、心は忘わすれずともさてこそ候に、去ぬる文永十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年が間此の山中に候に、佐渡国より三度まで夫をつかわす。いくらほどの御心ざしぞ。大地より

もあつく大海よりもふかき御心ざしぞかし。釈迦如来は、我が薩埵王子たりし時、うへたる虎に身を飼かいし功德、尸毘王とありし時、鳩はとのために身をかへし功德をば、我が末の代かくのごとく法華経を信ぜん人にゆづらむとこそ、多宝・十方の仏の御前にては申させ給ひしか。

其上御消息に云はく、尼が父の十三年は来たる八月十一日。又云はく、ぜに一貫もん等云云。あまりの御心ざしの切に候へば、ありえて御はしますに随ひて法華経十卷を送くりまいらせ候。日蓮がこいしくはせん時は学乗房がくじょうぼうによませて御聴ちやうもんあるべし。此の御経をしるしとして後生には御たづねあるべし。

抑、そもそも去々・去・今年のありさまは、いかにかならせ給ひぬらむとをぼつかなさに法華経にねんごろに申し候ひつれども、いまだいぶかしく候ひつるに、七月廿七日の申の時に阿仏房を見つけて、尼ごぜんはいかに、国府こう入道殿はいかにと、まづといて候ひつれば、いまだ病やまず、こう入道殿は同道にて候ひつるが、早稲わせはすでにちかづきぬ、こわなし、いかにせんとてかへられ候ひつるとかたり候ひし時こそ、盲目の者の眼のあきたる、死し給へる父母のえんまぐう閻魔宮より御をとづれの夢の内に有るを、ゆめに悦ぶがごとし。あわれあわれふしぎなる事かな。此もかまくらも此の方の者は此の病にて死ぬる人はすくなく候。同じ船にて候へば、いづれもたすかるべしともをぼへず候ひつるに、船破ふねやぶれてたすけぶねに値へるか。又竜神のたすけにて事なく岸へつけるかとこそ不思議がり候へ。

谷さわの入道の事、なげくよし尼ごぜんへ申しつたへさせ給へ。たゞし入道の事は申し切り候ひしかばをもひ合はせ給ふらむ。いかに念仏堂ありとも阿弥陀仏は法華経のかたきをばたすけ給ふべからず。かへりて阿弥陀仏の御かたきなり。後生ごしょう悪道に墮ちてくいられ候らむ事あさまし。たゞし入道の堂のらうにていのちをたびたびたすけられたりし事こそ、いかにすべしともをぼへ候はね。学乗房をもつてはかにつねづね法華経をよませ給へとかたらせ給へ。それも叶ふべしとはをぼえず。さても尼のいかにたよりなかるらむと歎なげくと申しつたへさせ給ひ候へ。又々申すべし。

七月廿八日

日 蓮 花 押

佐渡国府阿仏房尼御前